

生涯大切にしたい、恕

「子曰く、参や、吾が道は一以て之を貫く

と。曾子曰く、唯と。子出づ。門人問ひ

て曰く、何の謂ぞやと。曾子曰く、夫子の道

は、忠恕のみと。」

【子曰、参乎、吾道一以貫之。曾子曰、唯。子出。門人問曰、何謂也。曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣】

〈孔子言つ、「参(曾子)よ、私が説き且つ行つ道には、常に一貫した原理があるよ」と。曾子は「はい」と答えた。孔子は部屋を出た。他の門人たちが、「曾君、今の話はどついう意味なの」と問つた。曾子は、「先生が説かれる道は忠恕、即ち誠実と思ひやりだけだよ」と答えた。〉

孔子の説き且つ行つことには、常に一貫した筋があります。それを、曾子は、忠恕という言葉で他の門人に伝えたのです。忠とは、己を尽くす、己の心のまことを尽くすことです。つまり誠実です。恕とは、思いやりのことです。

私は、数年前、京阪神や東京の百貨店などに店を構えておられる大阪の洋菓子店の社長様にお会いしました。論語を生活や職業に活かす学習会の講師としてお願いし、その打ち合わせのためでした。社長室に通されてすぐに、社長様の椅子の奥に掲げてある扁額が目に残りました。その扁額には

一以貫之

と記されていました。

この社訓を大切に、全社員の方々と毎日洋菓子作り励んでおられることがすぐ想像できました。つまり、忠恕、一人一人が自分の心のまことを尽くし、食される方へ思いを致し日々作られ提供されているんだと。

でも、お話を聴いて私の想像は甘かったことがすぐに気づきました。食べる人の身になっておいしい洋菓子を作るだけでなく、原材料を作っていたらどうだろうか、家族への感謝の念も込めておられることに感動したことを覚えていきます。研修会当日、会場いっぱい聴講者は、感動的に学べたことが鮮明に残っています。

論語では、この恕を更に次のように説いています。

「其れ恕か。己の欲せざる所人に施す

こと勿かれ」

【衛霊公】

【其恕乎。己所不欲、勿施於人。】
この章句原文の意味は、

『門人子貢が尋ねた、「ただ一言で言い表せて、しかも一生涯大切にしようなものがありますか」、と。孔子が答えていうに、

〈それは恕(思いやり)かな。自分がそうしてほしくないことは、人にもしてはいけないということだ。〉(『して欲しいことをする』)でもある)つまり、一生涯大切にしていきたいことは思いやりだということ。』

日々の生活の中で仕事の中で、多くの人の悩みに、人間関係の悩みがあると思います。それをよくしていけることのできることで、それは、自分がいやだと思ふことを人にしないことだと教えているのです。

私は、この「恕」の言葉を印象深く心に刻んだ出来事がありました。それは、十数年前、福山市で広島県特別活動教育研究会が開催された時です。記念講演には、文部科学省の教科調査官が講演され、その最後に、プレゼンテーションの画面一面に、この「恕」の漢字を映写され、この恕、思いやりこそ人間関係で大切なものはない、と締めくくられたシーンです。しかも、最後の最後に、この思いやりには、許す、という意味も含まれる、と締めくくられたのが印象に残っています。その当時、また、国語の教科書にも論語が今ほど採り上げられていないとさだつたと思います。だから、深く印象に残つたのだと思います。前回述べた主体性や勁さは、恕のある組織や学級から身に付くのではないかと思います。

そういうえば、思考力や創造力など高次の学力形成を研究している米国マルザーノらの研究会では、それらを身につけるには、まず、受容風土と規律ある学級風土を挙げています。つまり、必ず自分の考えをもち解決し、それが間違いや失敗でも、からかいやひやかしなどが無く、励まし支え合えるような風土の方が安心して試行錯誤でき身に付きやすいことだと思えます。実際、ある学校で職員が一体となって取り組みそんな風土に徐々に変わっていくと思考力が上がっていった経験があります。まさに

「君子は人の美を成し、人の悪を成さず。」

小人は是に反す。」

〈君子成「人之美」。不_レ成「人之悪」。小人反_レ是。』
君子は人の成功を喜んで成就するようお願い、失敗にならないようする。小人は反対だ。〉

こういう組織、社会でありたいですね。

論語の中の孔子の仁、曾子の忠恕は、それぞれ心悟したことを簡単明瞭な言にして名を掲げ道をまとめた言葉で表現していますが、同じような意味だと考えます。それらは、人として履み行うべき正しい道である義を産み出していくんだということもわかる気がします。